

プレスリリース

平成 16 年 8 月 6 日
水産庁増殖推進部漁場資源課
独立行政法人水産総合研究センター
東北区水産研究所

平成 16 年度北西太平洋サンマ長期漁況海況予報

- 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
東北区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し（2004年8月～12月）

来遊資源量は昨年を下回る。

1. 本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業ホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)に掲載されます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：青木・宮崎（孝）
住所：〒100-8907 東京都千代田区霞ヶ関1 - 2 - 1
電話：03-3502-8111(内線 7376)、ファックス：03-3592-0759
直通電話：03-3501-5098
電子メール：keigo_chiba@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター東北区水産研究所企画連絡室
住所：〒985-0001 塩竈市新浜町 3-27-5
電話：022-365-1191、ファックス：022-367-1250

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	(社)漁業情報サービスセンター
北海道立網走水産試験場	水産庁漁場資源課
岩手県水産技術センター	独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所
宮城県水産研究開発センター	東北区水産研究所 中央水産研究所
宮城県産業経済部	
福島県水産試験場	
茨城県水産試験場	
千葉県水産研究センター	
静岡県水産試験場	
三重県水産技術センター	

サンマ太平洋北部系群

予報期間 2004(平成16)年8月中旬～12月
対象海域 北西太平洋(道東沖から常磐沖)
対象漁業 サンマ棒受網
魚体 大きさは肉体長(体長)で表示し、便宜的に大型魚(29cm以上)、
中型魚(24～29cm)および小型魚(20～24cm)と区分した。

予報

- (1)来遊量：来遊資源量は昨年を下回る。
- (2)漁期・漁場：初期の漁場はエトロフ島沖合となる。その後、道東の沿岸から暖水塊東側縁辺部に漁場が形成される。漁場の南下は例年並みで、三陸沖の初漁は9月下旬、常磐沖は10月下旬となる。
- (3)魚体：漁期前半は大型魚の割合が比較的高いが、後半は中型魚主体の漁獲となる。

説明

サンマの水揚量は、1990年以降毎年25万トンを超え安定していたが、1998年には14.0万トンに減少し16年ぶりに20万トンを下回り、1999年も13.5万トンであった。その後2000～2003年は20万トン以上であったが年ごとに増減を繰り返している。このように、近年の北西太平洋におけるサンマの資源量は変動が大きい時期にあると考えられている。

本予報は、参画機関が本年の8月までのトロールおよび流し網による漁獲調査と海洋観測の結果に基づいて行った。また、7月10日から出漁している10トン未満のサンマ漁船の情報等も参考としている。

(1)来遊量

6～7月に145°E～165°Wの海域で東北区水産研究所(北海道教育庁所属北鳳丸(用船)、山口県立水産高校所属青海丸(用船))が中層トロールを用いて漁獲調査を行った結果、150°Eより日本沿岸側には昨年同様サンマが極めて少なく、150～160°Eのロシア主張200海里水域の南側調査点では昨年より多くの漁獲がみられたが、さらにその東の海域での漁獲量は少なかった。また、釧路水産試験場が北辰丸によって7月中旬に149°30'～162°30'Eで流し網調査を行った結果、総漁獲尾数、流し網1反あたりの漁獲尾数ともに昨年を下回った。150～160°Eにおける東北水研の調査は6月下旬であり調査海域は北辰丸と同海域であったことから、7月上旬にはすでに魚群の多くは北上したものと考えられた。7月～8月上旬まで行われた漁期前一斉調査結果によると、岩手県水産技術センター岩手丸が行った岩手県沿岸の流し網調査では過去4年で一番多く漁獲されたものの、宮城県水産研究

開発センター拓洋丸、福島県水産試験場いわき丸、茨城県水産試験場いばらき丸、千葉県水産研究センター房総丸による調査では魚群の発見が少なかった。

トロールの結果に基づいて資源量推定を行った結果、2001年から調査を継続している162°E以西の小型魚以上の資源重量は236万トン（前年比147%）で過去最高となった。一方、2002年から調査が行われている沖合の162°E～177°Wでの資源重量は84万トン（前年比16%）であり過去最低値であった。両海域合わせた推定資源量は昨年を大きく下回った。

7月10日から道東沖で操業している10トン未満船による7月31日までの水揚量は1,673トン（昨年比67%）であった。また8月に入っても漁況は低調である。

以上のことから、昨年同様日本沿岸を北上した魚群は少なく、150°～162°Eでは昨年に比べ資源量は多いものの、その沖合は少ない。従って、漁期前半は来遊量の増加が見込めるものの、後半は沖合からの漁場への来遊量は少なく、漁期を通しては昨年を下回ると判断される。

(2)漁期・漁場

現在道東沖の表面水温は高く、また暖水塊も存在するためこの海域の上層水温は高めで推移している。このため、初期の漁場はエトロフ島沖合となる。その後、道東の沿岸から暖水塊東側縁辺部に漁場が形成されると考えられる。

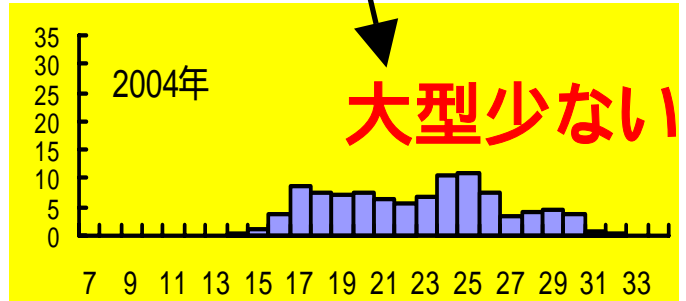
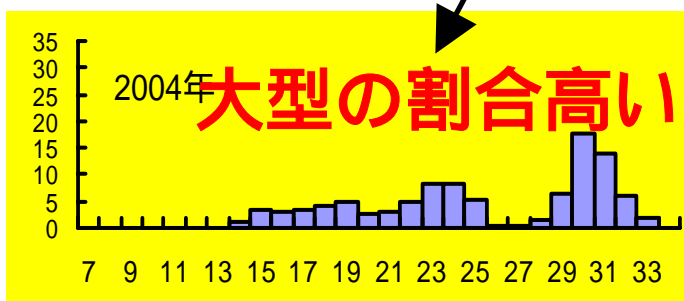
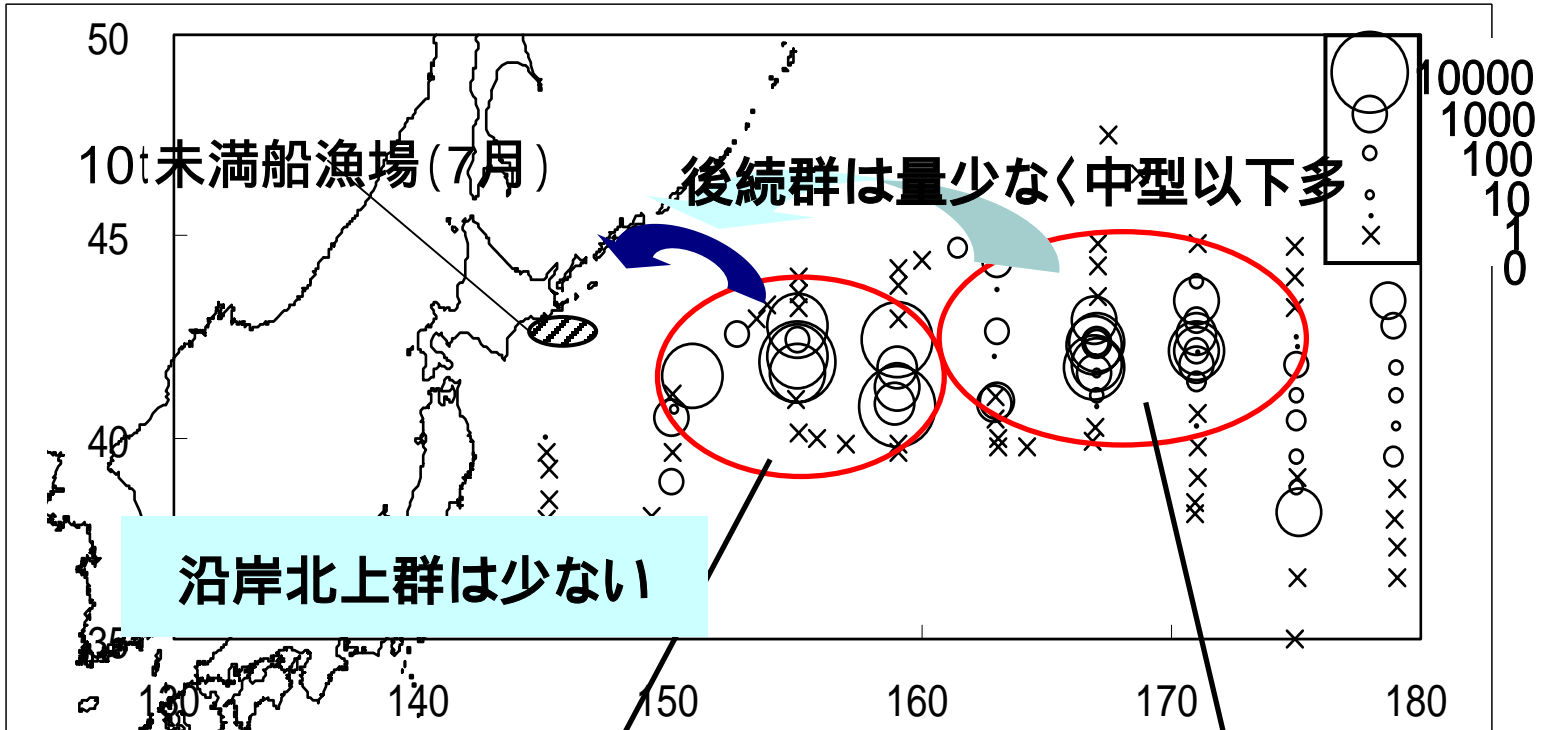
津軽暖流の東方への張り出しは平年並～やや強勢であるが、親潮第1分枝の張り出しは平年並～やや南偏し、魚群の南下を阻む暖水塊は見られないこと、黒潮系暖水の北限位置は南寄りでありサンマが南下する条件を満たしていることから、三陸沖(おおむね41°N以南)における初漁場は平年並（9月下旬）に形成されると予測される。その後常磐沖にも平年並の10月下旬から漁場が形成される。

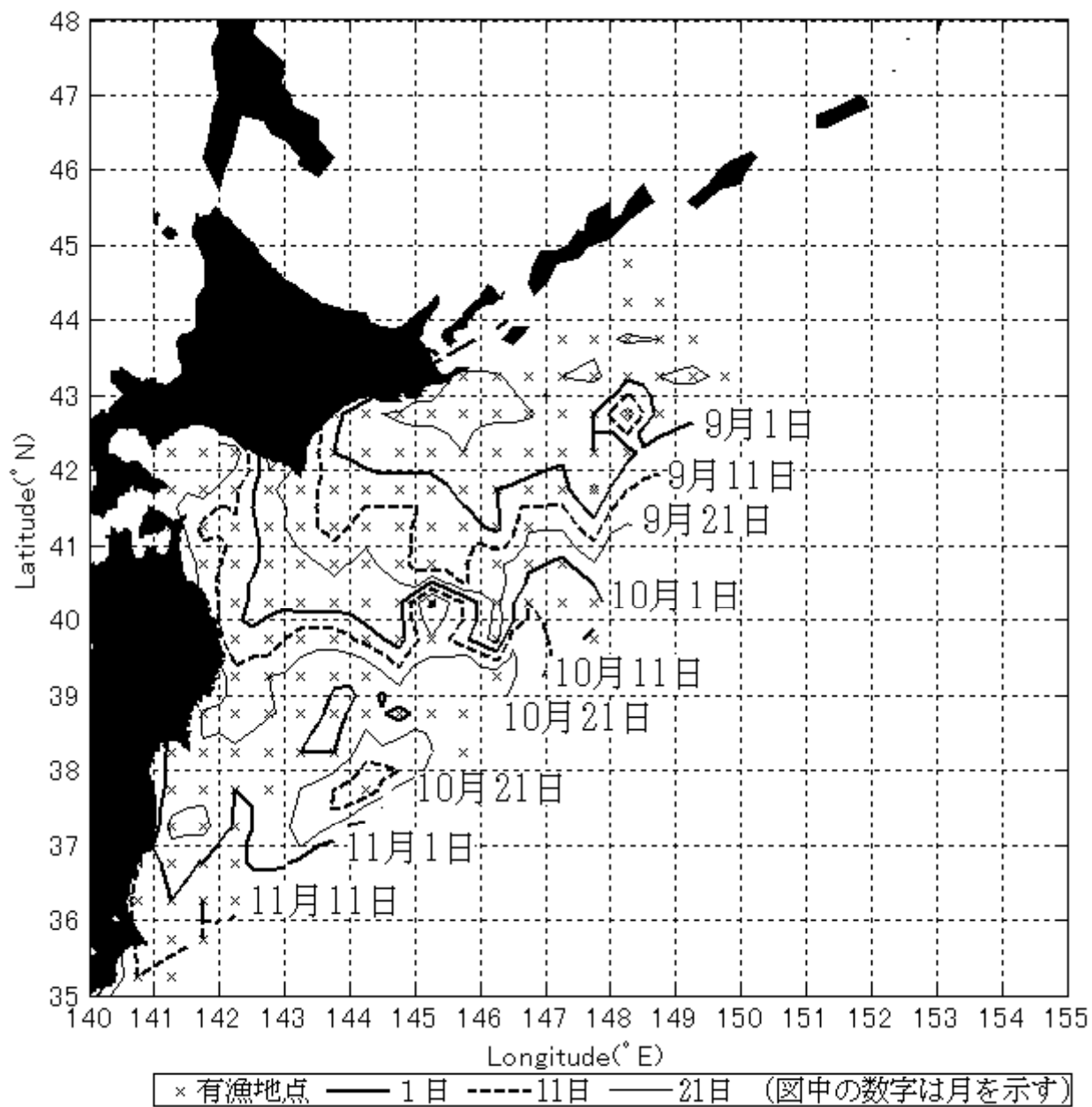
(3)魚体

東北区水産研究所による漁期前調査の結果、大型魚の割合は162°E以西では45.7%（尾数比）を占めていたが、162°E～177°Wでは9%と非常に低かった。推定資源尾数は162°E以西では大型魚が131億尾（昨年、98億尾）、中型魚が44億尾（同、23億尾）となり昨年を上回ったが、162°E～177°Wの海域では大型魚が15億尾（昨年、262億尾）、中型魚が61億尾（同、158億尾）となり昨年を大きく下回った。

以上から、漁期前半は大型魚の割合が比較的高いが、後半は中型魚主体になると考えられる。

調査のまとめ





サンマ漁場形成開始日(1993年から2002年の平均値)、漁業情報サービスセンター作成

平成16年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報会議 東北海区海況予報

平成16年8月6日

独立行政法人水産総合研究センター 東北区水産研究所

<<今後の見通し(2004年9～11月)>>

- (1)近海の黒潮の北限位置は、やや南偏(35°N～36°N)で推移する。
- (2)黒潮系暖水の北限位置は、近海で南寄りに推移する。
- (3)釧路東南東沖合、三陸沖、金華山南東沖の暖水塊はいずれも持続する。
- (4)親潮第1分枝の張り出しは、平年並～やや南偏(39°30'N以北)で推移し、金華山沖～常磐近海に冷水域が残る。
- (5)親潮第2分枝の張り出しは、平年並～やや北偏(40°N以北)で推移する。
- (6)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、平年並～やや強勢(143°10'E付近まで)で推移する。

(海況の経過(2004年1月～2004年6月)の特徴)

- (1)近海の黒潮の北限位置は、かなり南偏～やや南偏で推移した。
- (2)釧路の南東沖合、および金華山南東沖で暖水塊が停滞しており、5月以降には三陸沖合に暖水塊が認められた。
- (3)親潮第1分枝の南限は、2月まではやや南偏(40°N～38°N)であり、3月にやや北偏(41°N)、4、5月は平年並～やや南偏(39°N～38°N)し、6月になるとかなり南偏(36°30'N)した。
- (4)親潮第2分枝の南限は、5月まで平年並～やや北偏(40°N～39°N)で推移し、6月にかなり南偏(38°N)した。
- (5)表面水温は、東北海区で平年より低めで推移した。

(現況(2004年7月)の特徴)

- (1)近海の黒潮の北限位置は、かなり南偏している。
- (2)暖水塊が、釧路の東南東沖合約200km*、三陸沖約330km、および金華山南東沖約270kmにある。
- (3)冷水域が、金華山沖～常磐近海に複数ある。
- (4)親潮第1分枝の張り出しは、平年並(39°20'N)である。
- (5)親潮第2分枝の張り出しは、やや北偏(40°10'N)である。
- (6)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、平年並～やや強勢(143°E)である。

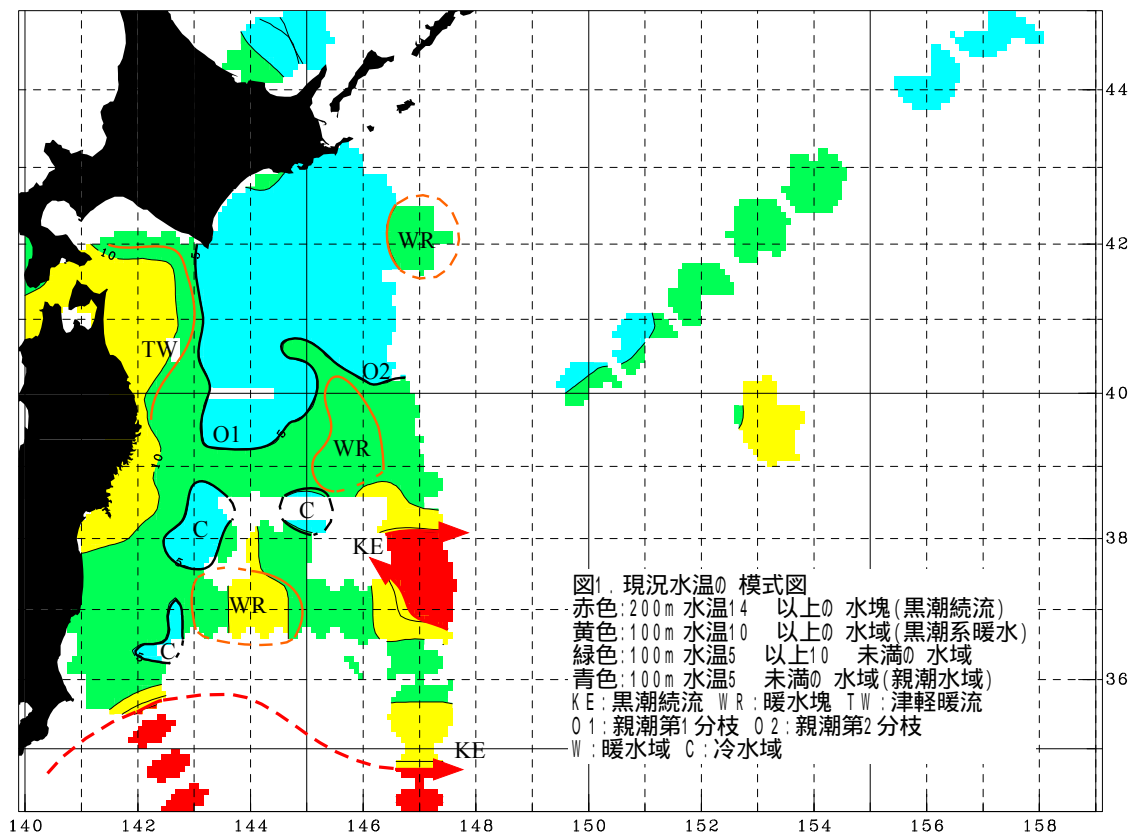
注：現況および今後の見通しは図を参照のこと。

「近海」は146°E以西、「沖合」は146°E以東を表す。

* 表面水温・人工衛星情報による

現況 (7月)

SCHEMATIC DATE: 2004/0701 - 2004/0731



今後の見通し (9月下旬を想定)

